Ⅳ－38

高齢社会におけるアクセシブルな河川整備に関する考察

秋田大学　学生員　○　藤田　勝　　秋田大学　正　員　清水　浩志郎
建設省　秋田工事事務所　鹿子沢　一衛　　株式会社　鵜沼設計　菊池　豊

１．はじめに

河川空間は、都市におけるオープンスペース、水、緑など多くの要素からなり、都市域における余暇空間としての魅力をもっている。そのため今後高齢社会においては余暇活動の場としての河川空間利用が見込まれ、高齢者の利用を考慮した整備が必要となってくる。とくに、高齢者は身体的機能の低下により、移動に対する負担が大きくなるため、高齢者の移動特性を考慮したアクセシブルな空間の整備が必要と考えられる。

そこで、本研究では余暇空間としての河川空間に対する行きやすさについて、交通施設の充実による行きやすさと、情報環境の充実による分かりやすさの２つの方向から、アクセシブルな河川空間のあり方について考察するものである。

２．研究の概要

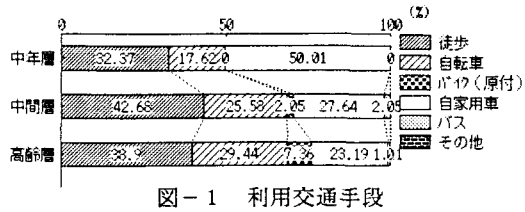
本研究では、河川空間における交通施設と情報収集について、それぞれ以下のような分析を行なう。まず、交通施設については、河川敷利用時の交通手段別に、河川敷の交通施設に対する意識を明らかにする。また、情報施設については、既存の河川公園を取り上げ、施設利用時における情報収集の現状を明確にし、河川空間における情報施設に対する意識を明らかにする。以上のような分析を行なうため、アンケート調査を行った。調査では、対象河川として秋田市を流れる雄物川を取り上げ、その沿川の秋田市と雄和町を対象地域とし、調査票の配布を行った。有効回収数は３１０票である。回答者の年齢構成、年齢層別の河川利用状況については表－１に示す。

表－１　年齢構成および河川利用の有無

	票数	水辺利用者
中年層（40～54歳）	109人	64人(58.7%)
中間層（55～64歳）	69	46　(66.7%)
高齢層（65歳以上）	132	94　(71.2%)

３．河川の行きやすさ

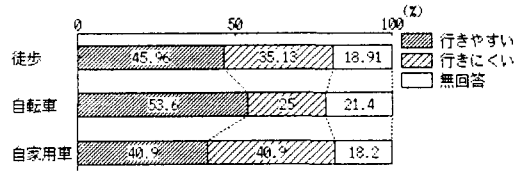
河川利用時に最も利用する交通手段については、年齢の違いに関わらず徒歩、自転車、自動車の利用が多くみられる（図－１）。とくに、自動車での利用は年齢が下がるにつれ利用者が多くなっており、



図－１　利用交通手段

今後河川敷での自動車利用者の増加が見込まれる。

次に、高齢者の河川への行きやすさに対する意識を利用交通手段別にみると、自転車については過半数が行きやすい空間であると回答しているのに対し徒歩、自動車においては行きにくいといった回答が約40％あり、各交通手段に対応した施設の整備が必要であると考えられる（図－２）。そこで、徒歩と自動車利用者の交通施設（階段、スロープ、駐車場等）に対する不便さについて質問をおこなった。



図－２　交通手段別の水辺の行きやすさ（高齢層）

まず、高齢層の徒歩利用者における堤防の階段、スロープに関する不便さについて、表－２に示す。階段に対する不便さは高く、とくに「夜間暗くて危険」「階段がない」への回答が多くみられる。また、構造的なものでは「手摺がない」に対する回答が多い。また、スロープに対しても「夜間暗くて危険」が多いものの、「勾配がきつい」といった構造に関する回答も多くみられる。このように階段・スロープとも、その数の不足が指摘される結果となった。

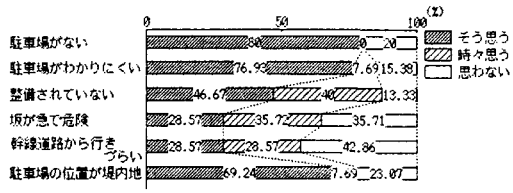
表－２　高齢者の交通施設への不満（徒歩）

階　段		割合(%)	スロープ		割合(%)
階段がない		３５．０	スロープがない		４５．４
階段あり	手摺がない	３２．４	スロープあり	手摺がない	３０．０
	勾配がきつい	３２．４		勾配がきつい	２１．６
	破損している	２９．７		路面が凸凹	１８．２
夜間暗くて危険		５１．３	夜間暗くて危険		３１．８

（そう思う＋時々思う）　　（複数回答）

また、夜間・夕方利用を考慮した照明施設の充実が必要であると思われる。

つぎに、自動車利用者の河川利用時における不便さについて図－３に示す。全体的に不便との回答が高く、とくに「駐車場がない」「駐車場がわかりにくい」「駐車場の位置」への回答が多くみられる。なお、他の年齢層の集計では「駐車場がない」といった回答が少ないことから、数が不足しているとは思われず、どこにあるかわからないといった分かりにくさの問題が関わっているものと考えられる。



図－３　高齢者の交通施設への不満（自動車利用者）

４．わかりやすさ

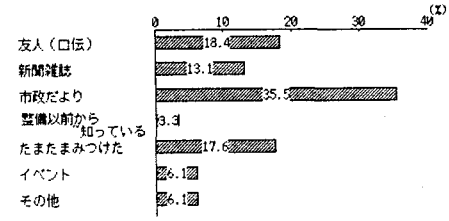
河川利用における情報収集の現状を明確にするために表－３に示す河川敷の余暇施設を取り上げ質問を行った。利用の有無については同表に示す。また、図－４～５は、個々の施設の集計結果を合計したものである。

表－３　河川敷の余暇施設事例及び利用割合

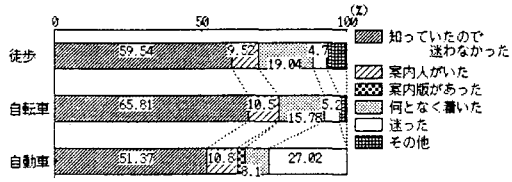
施設名	位置	利用者割合(%)		
		中年	中間	高年
水辺の広場	雄物新橋付近	33.9	34.8	38.6
河川公園	秋田大橋付近	31.2	31.9	25.0
ｺﾞﾙﾌ場・ｸﾞﾗﾝﾄﾞ	秋田市仁井田付近	60.6	49.2	49.2

まず、表－３に示す余暇施設を知った情報源については、「市政だより・回覧」の公的なメディアからといった確実な情報収集が多く見られるものの「友人から」「たまたま」といった不確実な情報収集も少なくない（図－４）。

つぎに、河川敷の余暇施設を初めて利用する場合の道のりで迷ったかどうかについて質問を行い、利用交通手段別に集計をおこなった結果、ほとんど「知っていたので迷わない」と回答しているものの高齢層の自動車利用者で「迷った」が多くみられる（図－５）。これは、高齢層の情報理解力の低下も考えられるが、根本にある情報源の不確実さといったものが影響しているものと考えられる。とくに今後、高齢者の河川敷への自動車利用の増加が見込まれる中で、自動車利用者に対する確実な情報の提供とくに現地付近での誘導が必要であると思われる。

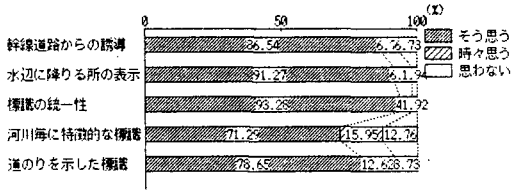


図－４　情報源（高齢層）



図－５　道のり（高齢層）

そこで、現地での情報提供施設として、標識を取り上げその必要性および標識のあり方について質問を行った。その結果、道のりを示した標識が必要であるといった回答は多く78.7%となる（図－６）。また、標識のあり方については、個々の河川の特徴を示した標識に比べ、どこの河川にいってもわかるような統一性を挙げる回答が多くみられる。



図－６　高齢者の標識に対する意識

５．まとめ

本研究では、アクセシブルな河川空間整備を交通施設と情報施設の２つの方向から考察を行った。その結果、交通施設については徒歩利用者で堤防における階段の絶対数不足と照明施設の必要性が指摘された。とくに、自動車利用者については、情報施設に関する集計からも見られるように駐車場等のわかりにくさが指摘され、情報施設など確実な情報源の設置が必要とされる。なお、アンケート調査は、「高齢化社会における河川検討委員会（建設省秋田工事事務所）」で実施されたものであり、本研究はそのデータを使用させて頂いたものである。ここに記し謝意を示します。